

報 告

第14回在北米被爆者検診

ロサンゼルス・ハワイ班に参加して

日本語による心のこもった健康相談を心がけて

広島県医師会常任理事 柳 田 実 郎

第14回在北米被爆者検診ロサンゼルス・ハワイ班が、さる6月18日広島を発ち、6月20日から4日間、ロス(Japanese Community Health Inc.で検診を行い、6月25日にはホノルルに移動、6月27日から3日間、Kakini Geriatric Care Inc.で検診を行い、7月2日広島に無事帰着した。団員は、真田幸三県医師会会長をはじめ、後掲の11名であり、受診者は、ロス168名、ホノルル101名の計269名であった。

広島県医師会により1977年から計13回行われてきた在北米被爆者検診は、昨年度から始まった厚生労働省の在外被爆者支援事業による補助事業となり、県医師会の支出も、総額の45%程度から15%程度に減少した。しかしながら、国の事業となつたことに対し、一部の被爆者協会の反発を招き、例年2班で行くところを、第14回はロス・ハワイ班のみとなるやに思われていた。その後の紆余曲折を経て、最終的にこれまで通りの2班集体ということになり、サンフランシスコ・シアトル班も、7月24日から8月6日まで渡米することになっている。

ロサンゼルスに向け出発

6月18日の朝9時から、広島駅新幹線乗り場へ出発式が行われた。県医師会から、常任理事や職員の方々の見送りがあり、中谷県医師会常任理事の司会のもと、寺岡県医師会副会長、三浦広島県福祉保健部長、ならびに守田広島市社会局長から激励のお言葉をいただき、担当理事が団長の決意を述べ、新幹線で成田に向かつて

出発した。また、この模様は、テレビ等で報道された。

心電図の機械2台、検尿の機械1台、検診に使う消耗品の入った大型スーツケース6個、および各人の手荷物などの厳しいチェックを受けた後、夕方5時過ぎに成田空港を出発し、現地時間の6月18日午前11時にロスの空港に到着した。

空港には、米国広島・長崎原爆被爆者協会の据石会長や寺西さんをはじめ、数名の方々が出迎え

に来ておられ、大量の荷物とともに、宿舎のホテル・ニューオータニまで送迎していただいた。ホテルにチェックインの後、据石さんや寺西さんから、諸々のお話を伺った。また、現地のまとめ役である寺西さんと、現地調達品の準備状況について確認作業を行った。この間、経理・総務担当の小笠原団員は、検診時の血清分離のための遠心分離機、血清保存の冷凍庫、広島に発送するためのドライアイスやクール宅配便などの確認作業に追われた。



総領事公邸にて

ロス2日目(検診前日)

6月19日は、午前10時にロス・アンジェル入日本国総領事館を敬訪問した。会見していただいた河野総領事は、広島ご出身の被爆二世ということもあり、今回の検診事業に大変関心が強く、また、國方首席領事は呉のご出身ということで、ご両名と団員の間で話がはずんだ。

郡医師会での記者発表と昼食会

午前11時からは、ロサンゼルス郡医師会(LACMA)で記者発表が行われた。そもそもLACMAには、米国の医師免許のない広島の医師が米国で検診することを可能とするため、1977年率先して広島県医師会と姉妹縁組を結んでいたが、サンフランシスコ、ホノルル、シアトルの医師会にも同様の姉妹縁組を働きかけていただき、その後の検診の度に、スーパーバイザーとして医師会員を派遣していただいているという経緯があり、この検診事業自体、LACMAの協力によって可能になったといっても過言ではない。これまでは、地元の日系新聞など数社のみでの参加で行われていた記者発表も、今回は、現LACMA会長の肝いりで、地元の新聞やテレビ数社をはじめ、29社に及ぶマスコミが部屋いっぱい押しかけるといった盛況であり、全米3位の規模を誇るLACMAのパワーを見せられた思いであった。



LACMAにて記者発表

記者発表の冒頭、据石会長が在米被爆者の状況と検診の意義について述べられ、続いて真田県医師会長が、1977年に検診事業が発足するまでの経緯やその後の検診の総括、ならびに今回からの補助事業になったことなどについて話された。次に担当理事が、本検診の目的は研究ではないこと、「言葉の問題などで地元医師から充分な情報が得られず、被爆に対する不安もかかえる在米被爆者に、広島医師が日本語で説明することにより、健康に対する不安感を取り除いて欲しい」という在米被爆者の方々からの強い要望に応えるため、広島県医師会が人道的見地から行って

いる事業であることを説明した。

ここで、複数の記者から質問が寄せられた。「日本在住の被爆者と在米被爆者の間にデータの違いはあるのか？」の質問には、担当理事が、「統計学的なことをいえる状況にはないが、印象からは両者に差はないと思われる」と旨述べた。また、被爆者と非被爆者の間の疾病の違いについては、箱田団員が、統計学的なデータの概略を、被爆線量と発ガン率の増加に関する放影研の研究成果をふまえて説明した。

最後に担当理事が、「本検診は、LACMAの協力なくしては考えられない」と旨述べ、LACMAに対する感謝の気持ちを表した。通訳なしで、全て英語で行われたが、大変スムーズな記者発表であった。また、これらの様子は、NHKを介して日本全国に放映されたと聞く。

正午からは、LACMA主催の昼食会が開かれた。自らのクリニックを休診にして、検診会場として貸与してくださったマツモト先生や、日系二世医師の会の世話役であるヤマウチ先生などの数名が、LACMAの代表として出席されていた。

検診会場の準備と総領事公邸での晩餐会

午後2時からは、検診会場のJapanese Community Health Inc.で、会場のセットアップを行った。受付、検尿・採血・血清分離の部屋、

心電図用の2室、診察用の6室を確保し、各々の場所に必要物品を配備した。真田会長も、診察業務への参加を強く希望されたものの、診察室が確保できず、被爆者協会の方々の話し合いなど、会長(顧問)としての対外的な面会や情報収集などに専念していただくこととなった。

午後6時からは、総領事公邸で歓迎の晩餐会が催され、団員とともにマツモト先生、ヤマウチ先生、被爆者協会の幹部の方々などが招待されていた。閑静な高級住宅地に建てられた、プールと日本庭園を持つ大邸宅で、ご馳走をいただいた。河野総領事、國方首席領事と海部領事が応対されたが、各テーブルでは、国際情勢から郷里の話題まで話しに花が咲いた。日系の医師でも、公邸に招かれることは稀ということであり、マツモト先生も大変感激しておられた。ホテルに帰った後、心電図担当の村上団員らは、心電図の機械の充電という仕事が残っていた。

■ ロス3日目(検診第1日)

6月20日は、午前8時から検診が始まった。事務職と行政の各団員は、7時半から受付業務を始めていた。医師団は予め、ボランティアの方々の打ち合わせを行った。採血と血清分離は、マツモトクリニックのナースが担当してくれたため問題なかったが、検尿や心電図など機械を使う部署には、ボランティアが慣れるまでの間、担当医師が付き合った。その他のボランティアは、女性受

診者を男性医師が診察する際に、診察室に同伴するシャパロンと呼ばれる付添い人、血圧測定係や受診者の案内係として働いていただいた。また、日系の青年がボランティアのコントロール役をこなし、マツモト先生もスパーバイザーとして毎日参加された。

受診者の導線は、検尿、採血、心電図の後、外科と婦人科を済ませ、最後に内科の診察を受けるというパターンであり、手帳交付や管理手などとの相談を希望される受診者は、さらにその後、行政の団員との面談を受けた。

■ 言葉の問題は想像以上に大きい

内科の診察には、1人の受診者に15分から30分かけた。理学所見には、3分程度しかかからないので、大部分の時間は、訴えに耳を傾け丁寧に説明することに終始した。受診者の大部分は、何らかの医療機関にかかっているものの、自分の病気についてちゃんと理解していない人が大部分であった。

日本の医者にとっては、インフォームド・コンセント(ICC)の手本のように思われている米国であっても、必ずしもICCが充分なされているとは限らず、また、言葉を充分理解できない患者に対しては、なおさらのことと考えられる。実際に、ロス滞在中に、全米ネットのテレビ番組で、医師のICCが不十分であるとする特集が放映されているのを見た。



検診会場待合室

われわれの日本語による説明で初めて、自分の病気やその治療内容について理解できたと思いき受診者も少なからず認められ、「本検診もまんざら捨てたものではない」という印象を持った。ところで、担当理事の診察室には、NHKテレビが診察風景の取材に訪れ、これも日本で放映されたらしい。

今回の検診業務の流れは、予想以上にスムーズであったが、行政の団員に対する相談件数は予想よりはるかに多く、受診者の大部分は広島被爆であるため、広島県の沖邊団員は、朝早くから午後遅くまでの激務となった。

■ ロス4日目(検診第2日)

6月21日は、前日と同様に検診はスタートした。2日目とあって、ウォーミング・アップの時間も不要であり、すぐにベースに乗り、初日より多目の受診者数であったが、早めに終了することができた。これには、行政の2人の団員の時間配分を効率的にするため、手帳の申請に関する相談は主として広島県の沖邊団員が、手当てなどに関する一般的な相談は主として長崎県の宿輪団員が対応することにしたのが、功を奏したものと思われる。

また、担当理事の診察室には、この日は長崎のNHKが取材に訪れた。取材の目的は、UCLA医学部小児科のジエームズ・ヤマザキ教授の特集番組を作るため、教授がこの検診をサポートしている様子を撮影したいということだった。ヤマザキ先生は、かつて長崎において、小児白血病を始めとする小児に対する被爆の影響を調査・発表され、被爆に関する本も出版されており、これらの功績により、日本政府から叙勲も受けられたとのことである。しかしながら、本検診との関わりはほとんどないらしく、「刺身のツマにされるだけ」という声も聞かれたが、取り立てて拒否するほどのことでもないと思われたため、受けることにした。

取材は単に、担当理事が受診者を診察する様子を、ヤマザキ先生がそばでニコニコ見守っているというシーンを撮影するのみであった。

■ ポール・テラサキによるディナー・ミーティング

夕刻より、UCLA医学部外科のポール・テラサキ名誉教授主催のディナー・ミーティングに、全員で参加した。テラサキ先生は、臓器移植に関する主要組織適合抗原(HLA)研究の草分け的存在であり、HLAタイプング用のマイクロプレートにテラサキ・プレートという一般名が付けられている程である。テラサキ先生が主催されている会に、ヤマウチ先生も参画しておられ、その関係でわれわれが招待されたということであった。

歓迎レセプションのようなものを想像していたが、実際は、日本人研究者とその家族によるポトラック形式(手料理持ち寄り)の月例パーティーであり、そのスピーカーとしてわれわれが呼ばれたというものであった。

食事もそこそこに、50人くらいの聴衆を相手にスピーチが始まった。最初は、日本人の指揮者の方が、「色と音楽」というタイトルで話されたが、フォーカスのはっきりしない話が延々と続き、聴衆の一部は居眠りしていた。

続いてわれわれの番になり、まず据石さんが、「自らの被爆体験」を話され、フロアのムードは一変した。次に、真田会長が、「ご自身と被爆との関わりについて、大変印象深い話をされた。すなわち、「原爆投下時、自分は三次の旧制中学に通っていたため、直接の被爆経験はないが、

自分なりの関わりについて話す。原爆投下後、三次に近い自宅に、被爆による全身熱傷の青年が担ぎこまれた。皮膚は剥がれ、化膿したりウジがわいたりという状況で、意識もモウロウとしていた。自分の家族に医者はいなかったが、家族全員で一生涯懸命看病した。食糧難の折、意識が回復してからは、川で採ったウナギなどを少しずつ口に入れ、栄養補給に努めた。その甲斐あって回復され、その人が医者であると分かった。3ヶ月の滞在の後、その青年医師は真田少年に、「君は医者になるべきだ」と言い残し、郷里の北海道に帰って行かれた。その言葉がキツカケとなり、後年医師になった真田青年は、くだんの医師が北海道で病院を開業されていると知り、北海道を訪れた。田舎の駅に降り立つと、その医師の二両親が、土砂降りのプラットホームに土下座され、「自分達が食って行くのも大変な時期に、よくぞ他人であるわが息子を助けてくださった」と地面に頭を擦り付けられた。」という内容であった。さすがに、眠っている聴衆は1人もいなかった。

引き続き担当理事が、団員全員を紹介した後、箱田団員から受け売りの「被爆による悪性腫瘍発生率上昇のデータ」と、本検診の目的についてスピーチを行い、会は終了した。

箱田団員や担当理事のよつに、HLAをかじったことのある者にとつては、ポール・テラサキと握手をしにくるのも悪くはないものとも思われたが、他の団員にとつては、検診で疲れ



検診風景(現地医師の協力)

ている折に、内心迷惑な招待であった。これについては、ヤマウチ先生も大変恐縮しておられたが、真田会長のお話が聞けたのが、団員にとってせてもの救いであった。

■ ロス5日目(検診第3日)

6月22日も、いともスムーズに検診は行われた。

担当理事の診察室には、この日、JPPNW事務総長の横路先生と旧制一中で同級生であった方が診察に訪れられ、世間話に時間を費やした。

放影研の事務職として参加されている小笠原団員は、連日、経理兼総務として気も体も使い過ぎ、体重が3キロも減ったということであった。また、県医師会の事務職として参加の向井団員は、ある日は受付係、次の日は検尿係、検診終了後はカルテのチェックと整理の係などなど、ボランティアの穴の開いた部門のお助けウーマンとして、縁の下で頑張っていた。検診を円滑に進める上で、得難い存在であった。

ところで、ホテルと検診会場は徒歩5分の距離であったが、道すがら、紫色の花を沢山付けたジャカランダという大きな木を眺めながらの往復であった。この木は、ロス中の至る所に街路樹として植えられており、ちょうど満開の時期とあって、日々目を楽ませてくれた。

■ ロス6日目(検診第4日)

6月23日は、ロスの検診の最終日であったが、特に問題なく進んだ。検診終了後は全員で、資料の整理、検診の機材や消耗品の荷造り、血清や便潜血用サンプルなどのドライアイス詰めなどを行い、ロスの健診は一段落した。

ところで担当理事は、個人的に、海外専用の携帯電話をJフォンと年間契約していたが、県医師会も旅行期間中のみの契約をし、向井団員が携帯を持ち歩いており、別行動をとる時など大変便利であった。一般的に、ホテル以外で国際電話をかけるのは、結構大変であり、ホテル

の電話代も高い。これまでは、毎日決まった時間に病棟に国際電話を入れるのが、随分骨であったが、今回は、そのような面倒からは開放された。ただし難点としては、これまでは、海外に出た時のみ、病院の呪縛から開放された気分になっていたが、今回は、海外も国内も変わらなくなったということである。

この日の夜は、ロスの被爆者協会との懇親会が行われた。検診を受けた方々も多く参加され、計70〜80人の出席があった。UCLAの学生の歌などのアトラクションもあり、なごやかな雰囲気の中で、団員全員が自己紹介を行った。会場の大部分の人は、英語と日本語の両方を理解でき、英語のみの人と日本語のみの人が僅かずついた。よって、恒例の挨拶は、真田会長は日本語で、担当理事は英語で行い、それぞれに理解されたようであった。

■ ロス7日目(資料と検体の発送日)

6月24日は、早朝から、LACMAのマーシー・ズウェリング会長とダイアン・キャッスル事務担当(何れも女性)との朝食会が行われた。団員の紹介後、真田会長が英語でスピーチをされ、これを受ける形で、ズウェリング会長が歓迎の言葉を述べられた。その中には、「サンフランシスコ、シアトル、ハワイなどの医師会に働きかけることがあれば、喜んでお手伝いしたい」というくだりもあり、他の医師会に対す

るLACMAの影響力の大きさを、再度アピールするものであった。また、2年後の検診への協力も約束していただいた。

ところで、子宮頸ガンの診断の PAP・スメアは、産婦人科医が直視下に綿棒で子宮頸部の細胞を採取するのが常であり、今回の検診でも同様のプロセスが繰り返された。これに対して、産婦人科医であるズウエリング会長は、子宮頸部の細胞を2〜3時間で自動的に集めることができる、傘を開くような構造の器具を開発し、既に特許も取っておられ、「これを使えば、患者が自分で細胞を採ることができ、産婦人科を受信しなくて済む」と、売り込みにも余念がなかった。

午前9時からは、小笠原団員が中心となり、カルテや検体を宅配便で県医師会に送り、ロスの健診は全て終了した。

夕刻からは、真田会長による会長招宴のような形で、今回お世話になった方々を、夕食に招待した。ロスの被爆者協会の方々とともに、マツモト先生やヤマウチ先生も駆けつけてくださり、互いに名残を惜しんだ。

■ 空路ハワイに移動

6月25日は、ハワイへの移動日であった。早朝から各人が出発の準備を行い、午前11時15分にロスの空港を発ち、現地時間の午後2時にホノルルに到着した。

空港では、米国広島・長崎原爆被爆者協会のヒラノ副会長(ハワイ支部長)、メイ・オダさん、ヒラノさんの弟さんなど数人で出迎えていただき、宿舎のプリンスホテル・ワイキキに送っていただいた。

一休みした後、皆、近くのショッピング・モールに、サンダル、半パン、Tシャツ、ミネラルウォーターなどの日用品の買出しに行った。

■ ホノルル2日目(検診前日)

6月26日は、午前中に、在ホノルル日本国総領事館に、武藤総領事と小川領事を表敬訪問した。ハワイではどこでもそうであるが、総領事以下全員がアロハシャツにノーネクタイという出で立ちであり、スーツに白のカッターシャツとネクタイというわれわれの姿は、ややイカメシイ感じすらした。総領事との会見自体は、本検診の一般論などを話し、比較的短時間で終了した。

次に、検診会場の Kuanini Geriatric Care Inc. のカジワラ院長とサカタ副院長を表敬訪問し、病院の設備をいろいろ見せていただいた。

昼前には、ハワイ医師会(HMA)のビルに移動し、HMA主催の歓迎昼食会にお邪魔した。HMAの会長や理事の方々とともに、スズキ先生が出迎えてくださった。

実は、今回の検診に出発する前に、東観音でご開業の宮西先生から便りをいただいた。宮西



ハワイ医師会にて昼食会

先生は、広大第2内科助教時代、記念すべき第1回北米検診の3人のメンバーの1人として参加されて以来、スズキ先生と親交を温めておられ、「既に、担当理事のことを、スズキ先生に宜しく頼まれた」との文面であった。スズキ先生には、この日以降、検診にずっと付き合っていた。

昼食会は、大きなテーブルを囲んで、おいしい弁当をいただいたり、記念品をいただいたり、楽しく時間が過ぎた。テーブルは、ハワイの代表的な花であるプルメリアを、レイのように糸に通して並べたもので飾ってあった。花瓶に立

花が当たり前の人間にとって、テーブルの上に直接に花が並べてあるのが、すごく新鮮であった。

午後2時からは、クアキニ病院に戻って、検診の準備をした。今回は、部屋数が充分にあり、真田会長にも存分に働いていただけになった。ロスでは、婦人科の内診と外科の直腸診のため、女性の受診者は下ばきを2度脱がねばならず、時間も労力もかかった。故に今回は、女性は同じ診察室で、外科の藤本団員と婦人科の兵頭団員が続けて診察することに変更した。こうすると、兵頭団員(女性:「ごめんなさい」)がシャパロンの役目も兼ねるため、ボランティアの仕事が1人分減らせるというメリットもある。結果として、真田会長のお役目は、男性受診者の直腸診と甲状腺の触診ということになった。

■ ホノルル3日目(検診第1日)

6月27日の検診初日は、ロスの初日と同様に、検尿や心電図の機械にボランティアの方々慣れるまでは、検尿担当の谷団員と心電図担当の村上団員はその指導にかかりきりであったが、それを過ぎると、いつものスムーズな検診に戻った。

早朝から開始したため、昼過ぎには一段落し、真田会長と担当理事のみ先に失礼し、スズキ先生に昼食をご馳走になった後、ハワイ大学医学

部のキャンパスを案内していただいた。結構広いキャンパスであったが、こちら並には手狭なことので、近々他の場所に引越す予定のことであった。

最後に、スズキ先生のお宅にお邪魔した。お宅は、丘の中腹といった趣の高級住宅街にあり、花を付けた木々に囲まれた静かなたたずまいであった。治安について質問したところ、「家の前の道が一本道で、逃げ込める横道がないため、泥棒は来ないのだ」という面白い説明が返ってきた。

■ ホノルル4日目(検診第2日)

6月28日は、特に問題もなく、検診は進んだ。ところで、天候に関してはと言うと、うっとうしい梅雨の日本から、からりと晴れたロスに移動した筈であったが、生まれつきの雨男が团长をしていたためか、ロスの滞在中ずっと天気が悪く、雨まで降るといふ始末であった。それに比べ、ホノルルは本来の晴天ではあったが、これもハワイらしい局地的なシャワー(スコール)が突然に降り出すことが、1日に何度もあった。晴天に黒い雲がいくつか浮かんでいるものの、どの雲から降っているのかも分からない、いわゆるお天気雨である。

これは、虹の発生にはモツテコイの条件であり、実際に、検診の終了間際に、なだらかな丘から海にかけて、大きな虹が架かった。日本の

虹は、何となく空の上の方にあることが多いが、この虹は、両端までハッキリ見え、あたかも海から生えて丘に吸い込まれているかのようであった。何か、すごく得をしたような気分であつた。虹が消えるまでずっと見とれてしまい、検診どころではなかった。

■ ホノルル5日目(検診第3日)

6月29日は、検診の最終日であった。この日も順調に検診は終わり、全員で後片付けと荷造りをし、検体をドライアイス詰めにした。作業中、マーシャル諸島の核実験被爆者でハワイに住んでいる3名の方が、検診団との面会を希望して来られ、箱田団員と担当理事が対応した。

1954年、ビキニ環礁で、ブラボーという名の15メガトンの水爆実験がアメリカにより行われた。この時、マーシャル諸島にあるロンゲラップ環礁の住人達は、逃げ遅れたため灰を浴び、島は放射性物質で汚染し、後年、発ガンなどの健康被害が問題化している。マーシャル諸島は、本土復帰前の沖縄のように、アメリカの委任統治となっている。アメリカはマーシャル諸島に、広島島の放影研のような研究施設を造ってデータを集め、癌などについては医療保障をしているが、他の病気には保障はない。マーシャル諸島政府も研究所を持つているが、アメリカに都合の悪いデータは公開しない。故



検診風景(受診者と)

にマーシャル諸島の住人達は、もっと多くの疾患に対する保障を、アメリカ政府に求めて行くために、第三国の研究者による疫学調査を希望している。

しかしながら、彼らの要望に沿った回答を、われわれが出せる訳はなかった。まず、広島・長崎の被爆とマーシャル諸島の被爆は、根本的に異なっている。前者は、空中から放たれた放射線を直接浴びたものであり、後者は、死の灰(放射性降下物)による二次的なものであり、むしろチェルノブイリ原発事故の被害に近いものと考えられる。よって、広島・長崎のデータは、彼らには当

てはまらないものといえる。また、疫学的に意味のある調査をするとなると、正常コントロールを含めた大規模の調査を長い年月行わなければならない、既に50年近く経過した今、調査を開始する意義があるか否か疑わしい。

さらに、話の中で、彼らは「箱田団員の所属する放影研が、このプロジェクトをやってくれる可能性はないか?」と繰り返し迫ってきたが、放影研にはアメリカ政府が出資しており、アメリカに都合の悪い研究をする訳がなかった。

これらの事実を、あまり失礼にならないように、われわれの英語で繰り返し説明し、アメリカ在住の被爆の研究者の名前を紹介したり、チェルノブイリ原発事故のデータやその研究者を採す方法を説明したりしながら、何とか納得していただいた。何れにしても、非常に心の重い作業であった。

■ ホノルル6日目(資料と検体の発送日)

6月30日は、午前中に、小笠原団員などにより、カルテとサンプルが宅配便で県医師会に送られ、検診業務の全てが終了した。

今回の検診の受診者数は、ロス168名(男性68、女性100)、ハワイ101名(男性29、女性72)、初診者数は、ロス24名、ハワイ3名であった。

ところで、ホノルルの検診で担当理事は、英

語しか喋れない2、3世か、状況が非常にヘビーな(濃い)人ばかり診たように思う。実際に前日も、「自分の財産を狙って、マフィアが毎日、家の周りに毒ガスを撒き散らすので、自分は病気になる」と訴える女性の話に付き合った。「毎日違うガスを撒くのだが、今朝は口がきけなくなるガスを撒かれたため、今は全然喋れない」と大声でまくし立てられた。あちらの世界の話は30分ばかり聞きながら、被害妄想の原因疾患について思いを巡らせるも、精神科の知識が皆無では致し方ない。早く話を切り上げるためには、「自分は毒ガス障害者の研究で学位を取った」となどは、おくびにも出せなかった。

さらにもう1人、3つの癌を含め、4回の手術歴があり、原因不明の下肢痛で車椅子生活となっている女性も、結構濃かった。大変な状況にあることは容易に理解できたが、これまでの病歴を30分聞いただけで、疲労困憊した。

ところで、毎日5時起きや6時起きが続いていたため、検診終了の翌日である30日は、朝8時までゆっくり寝ようと思っていた。が、その期待はもろくも崩れ、非情にも早朝6時半、昨日の濃い受診者の1人に、電話で叩き起こされた。不幸中の幸いというべきか、こちらの世界の人ではあった。「骨粗しょう症のことを言い忘れていた」と言っては喋り、「骨粗しょう症の薬は貰っていない」「いや、やっぱり貰っていない」「でも、薬の名前は分からない」云々かんぬん。20分くらいで勘弁していただいた。

朝食から部屋に帰ると、また電話。「薬の名前が分かった」と、薬の商品名を5つ6つ読み上げる。フォサマックス(日本ではフォサマック)以外は理解できなかった。結局30分付き合っ、カルテとサンプルの発送に付き合えなかった。自由時間を満喫できる筈のこの日は、朝っばらから気分はブルーだった。

空路帰還の途に

あつという間に2週間が過ぎ、7月1日の朝、空港に移動し、ヒラノさんご兄弟やメイさん達と別れを惜しみ、正午前にホノルルを発った。日付変更線を渡り、翌7月2日に成田空港に到着。JRを乗り継いで、広島に到着したのは、深夜の11時であった。にも拘らず、県医師会の常任理事や職員の方々が、出迎えに来ておられるのには驚いた。「真田会長が一緒だからかな?」でも、サンフラン・シアトル班が帰って来る時には、出迎えに来なければ...」

ところで、旅すがら常に感じていたことであるが、今回の検診は、本当にメンバーに恵まれた。皆ノリがよく、よく働き、思いやりもあり、和気あいあいと過ごせた。また、団員一人ひとりが、自発的(無意識?)に自分の役割を認識し、実行してくれていた。藤本団員と兵頭団員には、常に場の雰囲気盛り上げること努めていただき、場を盛り下げてしまいがちの担当理事の存在を、帳消しにして余りあるもので

あった。これには、ボケ役的存在の村上団員の存在も見逃せない。谷団員には、常にツアー・コンダクター並みの情報収集に当たっていたいただき、食事など、全員で出かける先は、彼に任せおけば安心であった。箱田団員は、その理知的な風貌に似合わず、茶目つきもあり、団に溶け込みきっていた。医者達から見れば、やや堅いと思われがちの、行政や事務職の方々にも、違和感なく楽しんでいただけだと思う。勿論、これら10人を、雲の上からコントロールされていた、真田会長の存在も忘れることはできない。団員の方々と、本検診事業にご協力くださった全ての皆様に、深謝いたします。



検診風景(ボランティアと一息)

団員名簿(ロス・ハワイ班)

- 顧問 真田 幸三 広島県医師会長
- 団長 柳田 実郎 広島県医師会常任理事・広島鉄道病院内科
- 団員 箱田 雅之 放射線影響研究所内科
- 団員 藤本三喜夫 広島記念病院外科
- 団員 谷 洋 広島赤十字・原爆病院内科
- 団員 兵頭 麻希 広島大学医学部付属病院産婦人科
- 団員 村上 晴泰 広島大学医学部付属病院第2内科
- (事務)
- 団員 小笠原 優 放射線影響研究所疫学部原簿管理課長
- 団員 向井みどり 広島県医師会総務課係長
- (行政)
- 団員 沖邊 雅子 広島県福祉保健部衛生・被爆者総室被爆者・毒ガス障害者対策室
- 団員 宿輪 亨 長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課課長補佐